The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	単行本という〈俯瞰者〉の目
Author(s)	長原, しのぶ
Citation	太宰治スタディーズ. 2014, 5, p. 4-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97198
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

一九三六年、太宰治の第一創作集として単行本『晩年』が砂子屋書房より刊行された。そこには「葉」「思ひ出」「魚服記」「列車」「地球図」「猿ケ島」「雀こ」「道化の華」「猿面冠者」「逆行」「彼は昔の彼ならず」「ロマネスク」「玩具」「陰火」「めくら草紙」の十五作品が並ぶ。第一回芥川賞候補作となった「逆行」（『文芸』一九三五・二）や太宰の代表作「人間失格」（『展望』一九四八・六～八）のキャラクター大庭葉蔵の登場する「道化の華」（『日本浪曼派』一九三五・五）など注目すべき作品もあり、個々の作品研究も年々深化している。しかし、この『晩年』ほど一冊の単行本として濃密に機能したものはないのではないか。

例えば、鳥居邦朗（『太宰治論――作品からのアプローチ』一九八二・九、雁書房）は『晩年』の作品群の初版収載順と発表順を対照させ、「葉」「思ひ出」を〈自伝的作品〉、「魚服記」以下五編を〈客観的手法による作品〉、「道化の華」以下八編を〈小説方法模索の作品〉と分類し、それぞれの作品の特徴を捉えたうえで『晩年』全体像を明らかにしている。そして、渡部芳紀（『太宰治心の王者』一九八四・五、洋々社）は『晩年』について、「十五作品は、漠然と配列されているわけではない。冒頭の二作品は顔または首に相等する部分である。「魚服記」から「陰火」までが胴、「めくら草紙」が尾である」とし、「胴」の中でも「道化の華」が「中心、要の部分」にあり、そこを基点に「オーソドックな作品群」と「前衛的な作品群」が展開する形となっていることを指摘している。これらの視点によって、個々の作品は決して孤立することなく、『晩年』という一冊の単行本の中に存在することが前提となり、単独のテキスト内に留まることから解放される。それは、作品を読み解こうとする者の視野を広げる。個別の作品の初出年月から単行本の発行年月へと時間的空間は拡大し、単行本に収載された他作品と縦横の軸を結ぶ行為に繋がるからだ。さらには、単行本に付された題名の意図に思いを馳せ、改めてそこに収載された作品の意味を問い直そうとする意識をも生み出していくだろう。

このように『晩年』が単行本として大きな力を有する背景には、太宰の初めての小説集であったことは言うまでもなく、太宰自身が「私はこの短篇集一冊のために、十箇年を棒に振つた。まる十箇年、市民と同じさはやかな朝めしを食はなかつた。私は、この本一冊のために、身の置きどころを失ひ、たえず自尊

イントロダクション
――単行本という〈俯瞰者〉の目

長原　しのぶ

心を傷つけられて世のなかの寒風に吹きまくられ、さうして、うろうろ歩きまはつてゐた。（…）百篇にあまる小説、破り捨てた。原稿用紙五萬枚。さうして残つたのは、辛うじて、これだけである。これだけ。」（「文藝雑誌」一九三六・一）、「もう、これが、私の唯一の遺書になるだらうと思ひましたから、題も、「晩年」と置いたのです」（「文筆」、一九三八・二）と述べるように、作家出発の原点を〈晩年〉の文字に込め、そこに選んだ作品に何らかの意味を含ませていることを窺わせるからだといえる。これを逆説的に捉えれば、他の単行本は『晩年』ほどにはその力を発揮されないまま見過されてきたとは言えないか。太宰自身の確たる言説が確認されずとも、ある時期にある意図をもって幾つかの作品が集められ、それを一冊にまとめる作業にはそれが作者の思いなのか、出版社の戦略なのかは別にして何らかの意思が働いていたはずである。いずれにしても、一冊の単行本となった時点で一つの作品は単純に一つの作品として存在するのではなく、より多くの読みの可能性を持つことになるのだ。

今改めて太宰の単行本に着目すれば、その没年までに約三十七冊（叢書、随筆などは除く）が刊行されている。題名を見ると、その特徴から概ね三つに分類することができる。一つ目は、『愛と美について』（一九三九・五、竹村書房）、『女生徒』（一九三九・七、砂子屋書房）などのように収載作品の一つを題名にしているものである。刊行された単行本のほとんどがこれに該当する。二つ目は、『新ハムレット』（一九四一・六、文藝春秋社）、『正義と微笑』（一九四二・六、錦城出版社）、『右大臣実朝』（一九四三・九、錦城出版社）、『津軽』（一九四四・一一、小山書店）、『惜別』（一九四五・九、朝日新聞社）、『お伽草紙』（一九四五・一〇、筑摩書房）の書き下ろし小説としての単行本である。そして、三つ目は、『晩年』と同様、収載作品を包含する形で新たな題名を付したものだ。『虚構の彷徨　ダス・ゲマイネ』（一九三七・五、新潮社）や『女性』（一九四二・六、博文社）である。

それぞれの単行本に如何なる力が働いているのか。小特集では、太宰の単行本を世に送り出した数々の出版社の戦略と特徴を整理し、研究論文では単行本から作品を照射していく。単行本という〈俯瞰〉する眼差しが新たな作品の読みと可能性を与えてくれるはずである。